

日本近海は、海洋生物地理学的にインドー西太平洋区、東亜区、北太平洋区の三つの生物地理区が展開していることから、生物種の多様性を生み出し、寒帯から熱帯域に生息するさまざまな海洋生物が確認される。実際には、各区の接する境界域にはそれぞれ推移帯が存在していることから、ミクロ的に七つの海洋生物地理学区が日本を取り巻いている。このような背景から日本列島の各所で多彩な動物分布が見られ、太平洋側および日本海側の東西南北の地域間には特異的な動物相が展開している。

本県の生物地理区は島根半島日御碕を起点に南北に分けるように、北側は中間温帯海区、南側は暖温帯海区の動物相が展開しており、島根県の海域にはそれぞれの海区の北限と南限の生物が共に分布していることになる。

しまねレッドデータブックの改訂にあたって、環境省第4次レッドリストには掲載されていないサンゴ類（刺胞動物門花虫綱）を本県が独自に提起した理由は、このような島根県海岸域の海洋生物地理学的特殊性が存在するためである。一方で、海洋生物の多くは、生活史の中で海流に乗って移動が可能である事、さまざまな環境的要因によって10～20年の周期で変動する一次的な“擬集団”なのか、明らかに“土着”の種群であるかの確認が必要な事、この点が今回のレッドデータブック掲載種として選定する重要なポイントになっている。

本県のサンゴ類は対馬暖流の影響が強い隠岐諸島域、大田から日御碕、島根半島域の岩礁を中心に、八放サンゴ類であるイソバナやウミトサカ、ヤギの仲間、六放サンゴ類であるイシサンゴ類（非造礁性および造礁性）が透明度の高い海域に豊富に生息している。これまでの学術的調査によって明らかにされた隠岐諸島の非造礁性イシサンゴ類は5科15種に及ぶ。ピワガライシ科フタリピワガライシ、チョウジガイ科アオチョウジガイモドキ、センスガイ科ツボセンスガイ、ニイノタコアシサンゴ、キサンゴ科ジュウジキサンゴ、キサンゴ、ヘンペイキサンゴ、ナガイボキサンゴ、イボヤギ、タバネイボヤギ、ムツサンゴ、ツボサンゴの2種、シオガマサンゴ科ジュズサンゴ、シオガマサンゴである。

ムツサンゴとシオガマサンゴは日本海北部に分布する種であり、それ以外の種は温帯ー亜熱帯域に分布するインドー西太平洋区に分布する種である。日御碕域では、ベルベットサンゴ、アワサンゴ、アミメサンゴ、キクメイシモドキ、フタリピワサンゴ等が報告されているが、島根県近海のサンゴ類の生物地理学的研究は非常に乏しく、今後の調査次第では、生息種の増加や生息域が拡大する可能性が多大である。

今回選定したイソバナ（八放サンゴ）、イボヤギとムツサンゴ（六放サンゴ）の3種は、かなり広範囲に分布が見られる比較的安定した種であるが、水深1～5m以内の浅海にも生息していることから、人為的な影響を受けやすく、堤防建設、港湾浚渫作業等の海事工事、油汚染や漂着物によりその生息域が脅かされる危険性があることが選定した理由である。また、これらの生物は、透明度の高い海域に見られることから、海洋汚染の指標生物として、準絶滅危惧種として選定した。今回は選定されなかったサンゴ類や学術的に意味のあるシライボヤ（脊索動物門尾索綱）のような貴重種を注意喚起種として情報不足種に選定する事も考えたが、環境省が提言している定量的な概念をとり入れた調査を広範囲に実施して、より詳細な分布域の確認をする必要と、今後の環境省の海棲無脊椎動物に対する見解（ガイドライン）を参考にしながら、次回の改訂版作業に間に合うように調査を実施する方向で検討している。

隠岐諸島および島根県の海岸域は日本海南部に位置していることから、日本海特有の海洋現象がこの海域に生息している生物、特に温暖帯域の動物に与える影響は非常に大きい。南からの対馬暖流と北からのリマン寒流の勢いの強弱による海水温度の変化、両海流のバランス、冬の季節風の吹き出しによる深海の冷水湧流の影響など、不安定な環境の中で、常に生息が脅かされるギリギリの状況の中で生き続けていると思われる、10～20年の周期でかれらを見守っていく必要がある。

（秋吉英雄）